

## 書評・紹介

Jan T. Eggardt:

### Faith and Knowledge in Early Buddhism

太田清史

本書の著者について筆者は全く知るところがない。ただ著者自身の「まえがき」によって、著者が一九七六年十一月現在、スウェーデンのルンド(Lund, スカンジナビア半島南端の小都市)在住の一教師であることを知る。彼は教師としての勤務のかたわら、Rune Johansson の助言、Mrs. Elise Pauly の励ましや指導を得てこの研究を成し遂げた、という。その内容は一九七五年、ランカスターにおいて開かれた国際宗教学会において発表され、C. J. Bleeker, John Ross Carter, Jan Bergman の諸教授の批評や助言を得て、このモノグラフにまとめられた。

## 一

本書はその標題が示す通り、初期佛教における信(saddhā, pasāda)と慧(paññā, ñāṇa, vijjā, etc.)の考察を主題として

いる。そして、それによって初期佛教の究極の目標である解脱・涅槃の意味を明かそうと試みている。したがって、これは阿含の実践道の探究を意味するものである。戒・定・慧・解脱・解脱智見の五分法身による修道過程と三十七道品の一種である信・勤・念・定・慧の五根との比較は、近代の佛教研究においてしばしば採り上げられてきた課題であるが、本書においてもそれらが取り扱われている。

著者は論述に際して一風変わった方法を採用している。

まずテキストには PTS 版のマッジマニカーヤ(MN)だけを用いている。その選択の理由として、まずパーリニカーヤ全体について

(1) テーラワダーの伝える聖典の最古層はアソーカ王の時代には完成していた(p. 6)。

(2) 完備した形を持ち、原文で保有される唯一のものとして、パーリ聖典だけが初期佛教の全体を知らせてくれる(p. 148)。

この二点を挙げ、さらにそれを MN に限定する理由として、  
(3) MN はパーリニカーヤという質的に均等な文学の中でも、最も均質な部分である(p. 148)。

ことを挙げている。そういう訳でここには論書および註釈書の類は一切取り上げられてはいない。

ニカーヤ中には比丘が阿頼漢果を得ることに関する記述にきまってい出される有名な文句がある。それは MN Index 中の Arahatta の項に Formula of Arahantship ABCD として見

出されるものである。すなわち

(A) *khinā jāti, vustān brahmaccariyaṃ, katañ karaṇiyaṃ, nāparān itthattāya.*

(B) *eko vūpakaṭṭho appamatto ātāpi pahitatto viharanto nacirass'eva yass'atthāya kulaputtā sammā-d-eva agāraṣṇā anagāriyaṃ pabbajanti tad-anuttaraṃ brahmaccariyapariyosānaṃ dīṭṭhe va dhamme sayāṃ abhiññāya sacchikatvā upasampajja vihāsi.*

(C) *khināsavo vusitavā katakaraṇiyo oḥitabhāro anuppatasaddatto parikkhinābhavasamyojanaṃ samma-d-aññā vinnuto.*

(D) *akuppā me vinnuti, ayaṃ-antimā jāti, na-tthi dāni punabbhavo.*

の四種である。

著者は今、これらのきまり文句を含む経 (M. N. 一五二経中、少なくとも四〇経にそれが見出されるといふ) を手がかりに、そこにあらわれた信と慧の概念についての考察を加えようというのである。しかし四種のきまり文句すべてを渉猟するのびはなく、経蔵中最も頻繁に見られる (A) に的を絞っている。その理由は「(A) が大変重要な状況における佛陀に関して用いられているから」(P. 4) であるといふ。

こうして、以下 (A) を含んだ経 (M. N. 中三三経) のすべてを網羅して、後にあげる本書の目次からも明らかのように、それらをケースごとに分類してそこから導き出される共通の課題と

その結論を述べてゆくのである。

著者はそれに先立ち、一つの仮説を立てている。それは「佛陀の教説の独特な機能は、世俗の放棄、分析及び瞑想という手段によつて確証され、現実化される無我の仮説の上にうち立てられており、そして究極の解放、すなわち涅槃、を知ること、すなわち経験するのの the knowledge/experience of utmost release/*nibbāna* の上にならなければならない」といふのである。(P. 5) などである。

## II

以下は本書の構成である。

Preface .....	xi
Introduction—The problem and the method .....	1
I. Formula A .....	7
II. The quotation-verbs of the formula .....	11
III. The formula as starting-point —Suttas 80, 105, 112.....	19
IV. The formula in close connection with “parinibbāyati”—Suttas 11, 37, 140 .....	24
V. The relation between the formula and the arahant-state—Suttas 7, 57, 73, 75, 82, 86, 92, 124 ...	35
VI. Formula A expanded .....	48
VII. Formula eA after “seeing thus”—Suttas 74, 22, 109, 147, 148 .....	50

VIII. Formula eA after "for me knowing thus, seeing thus"—Suttas 4, 19, 36, 100, 112 .....	70
IX. Formula eA after "for one knowing thus, seeing thus"—Sutta 7 .....	89
X. Formula eA after kamma-experience and "for one knowing thus, seeing thus"—Suttas 60, 76, 121 .....	93
XI. Formula eA after preconditions—Suttas 27, 39, 51, 65, 79, 101, 125 .....	114
XII. Final remarks .....	147
Bibliography .....	173
Index .....	177

また右の各章はI—VIIを除いてそれぞれ同様の構成を示している。それらはまず各経の主要部分の概観に始まり、次いで各経の構成を一覧表にして示し、最後にそれらに対する検討(Discussion)で締め括っている。この中、「構成」(Structures)として掲げられた一覧表は各経構造の類似点が一目で判る大変重宝なものである。

### III

各章の要点をまとめてみよう。  
全十二章の中、第五章までは主として(A)そのものの意味と阿羅漢果との関係について論じられている。

まず第一章では(A)の正確な翻訳を試みている。著者は I. B.

Horner はじめ四人の先学の訳を参照しつつ、(A)に次の訳を与えている。"Exhausted is birth, completed is the religious life, fulfilled is that which was to be fulfilled, nothing more is left for this (sort of) existence." (p. 8) ところが有学(sekha)の目標であり、無学(asekha)の智、即ち経験であるところ。

こうして我々が問題と感ずることは、著者が itthattāya や 'for this existence' と訳しているところである。それについて著者は(A)の意趣をこの「輪廻界からの究極の解放」(p. 9)と把握しているのであるが、itthattāya なる語の意味するところについては我が国でも種々議論のあるところ(例えば南伝大蔵經においてもこの語は訳者によって諸訳まちまちであり、今日に到るまでその統一裁断をみない)であり、それが輪廻を予測したものであるかどうかについては、今少し慎重な検討に待たれるべきであろう。

第二章は(A)のあとに現れる特定の動詞「すなわち khīṇa jati, ..... itthattāya'ti pajānati/abbhaññasi. ところの場合の pajānati 及び abbaññasi についての考察である。これらの動詞は人称・時制の異なることはあるが、ほとんどの場合(A)に付随している。著者は両動詞に共通の jānati「知る」という基幹動詞に注目して、それが真の智慧あるいは体解を通しての認識を意味するものであることを知る。佛教で言うところの智慧は単に知的な理解を指すものではなく、こういった経験を通じて得られるのである。そこに「阿羅漢は未来において形而上学

の実体として存続する」(p. 9)と考え佛教を不滅主義的 (eternalistic) に理解する立場が否定されるのである。

第三章からはいよいよ(A)を含む諸経の分類に入る。第三章は経の冒頭から(A)が見出される場合である。これらの経は次の構造において共通している。佛陀への信頼感——五欲に捉われた自己の発見——三学の経験——苦悩の根源と自分自身を知ること——解脱——束縛からの解放。この調査結果は後に信に関して用いられる。

第四章は parinibbāyati という語の直後に(A)の見出される経をあげている。佛弟子としての理想の人格を説くこれらの経の調査を通じて、parinibbāyati が正しく今生における体験であることから再び nāna (pañña) が経験智であることが強調される。また M. 140 等に見られる「これは私のものではない。

私はこれではない。これは私の我ではない。』と、かくの如くそれを如実に正慧をもって見て、……」(M. N. 3. 240) という文脈の中で、正慧 (sammappañña) が「無我観をあらわすための語であり、煩惱の垢を離れる実践の中に体験することをあらわす語」(p. 27) であることに注目し、「無我は涅槃の必要条件である」(p. 34) ことを見て、先に立てた仮説に一步近づいている。

第五章は、授戒——(A)を知ること——(B)を知ること——阿羅漢果を得ること、という構造を有する経についての考察である。ここで導き出されるのは(A)を知ることが阿羅漢果の必要条件であり、阿羅漢果が(A)を知ることの十分条件であるということである。

ある。それより又、第四章と関連して涅槃が阿羅漢果の必要条件であるとされるに到る。

第六章は第七章以下を論ずるにあたって、一つの前提条件を提示している。それは以下に扱われる諸経については、(A)がその前後の文脈も含めて論じられるということである。すなわち vimuttasmiṃ vimuttān iṭi hāraṇa hoti/ahosi; khīṇa jāti, ……: itthattāya'ti pajānāti/abbañhāsini/abbañhāsi. など

(A)が拡大される。これを eA (Formula A expanded) と呼ぶことにする。加えて著者はこの文中の「解脱した」(vimutta) ということと「智」(ñāna) とが相互に必要な条件となっていることをあげて、これらが佛弟子の宗教生活初期に典型的な経験と知識との相互依存を示唆するものであることを指摘している。

第七章以下第十一章まではまたその論述方法に共通の形式を有している。これらの章は各々 eA に先立つ文句又は概念に注目している。それは eA に到る経過を辿ることによってその意味するところを鮮明にしようとの試みである。著者は各経の概観に際し、a. としてそれら キー・ワード が現れるまでの教説を眺め、次いで b. として キー・ワード が前提条件となって現れる佛弟子の進境を学ぶ。最後に c. として全体の経過を議論する、という方法を採用している。勿論これは各章末の Discussion にも共通である。

第七章の キー・ワード は「かくの如く見つゝ evaṇ passan」である。「見る・考察する」という意味が passan に与えられるならば、その見られ、考察される対象は何か。著者はこれを

evam passam に続く、「厭離・離貪・解脫・解脫智見」(A)を知るこゝ、という構造の必要条件である無我の論理的筋道である」(p. 68)という。それはまた我々に「究極の目標は苦の滅である」(p. 69)という智慧をもたらすという。

第八章は「私がかくの如く知り、かくの如く見るとき tassa me evam jānato, evam passato」がキー・ワードである。ここには五蓋 (pañca nivarāṇāni) — 四禪 — 三明 — tassa me…… — 三漏よりの解脫 — eA<sup>1</sup>、という構造が見い出される。注目されるべきはその修道方法である。佛弟子は業の当体 (kamma-seṭṭhi) が本来無我であることを知ることが、そのまま我執からの解脫であることをそれを通じて知るのである。そしてその解脫も修道体験によってもたらされたものであることから、ここに解脫と涅槃の同義であることが示唆される。(p. 87, 取意)

第九章は信について述べた数少い章の一つである。ここではまず一般論として、目標に向かって前進する精神にとつては佛法僧の三宝に対する淨信 (sadda) が必須条件であることを説く。そして更にその淨信が阿羅漢果と解脫の、経験および智識をもたらすとも言う。(p. 92 取意)

第十章で言うところの Kamma-Experience とは、例えば M. 121 の場合、「それがあるのを『これあり』と知る taṃ santam idam athūhi pajānāmi」という因果の道理を四無色定の一々について吟味しつつそれを体得してゆく、その過程を指している。この章に引用された経には、佛陀によって戯論と見なされたとこころの形而上学の実在を支持するような業思想がみられる。

それを四禪又は四無色定という経験的な手段によって一々打ち破ってゆく。そしてそのあかつきに(A)の知識と経験に目覚め、涅槃へと導かれてゆくのであるが、そこに到る方法としての経験的眞実 an experienced reality なる瞑想の過程を Kamma-Experience と規定しているのである。

著者は無常・無我なる自己を知ることより始まるこの佛教特有の業思想を強調しつつ、最終的には離貪・滅によって導かれる涅槃の状態が、非形而上学的なものであることを暗示しているようである。

第十一章も信を論じた一つである。ここに言う Precondition とは、経の前半における如来の出現を指しており、如来に対する信順を前提条件として(A)に導く経についての論究がなされている。如来への信順とは、信等の五根の一としての saddha のことである。この信は「師に対する弟子の心構え」(p. 143)とみなすことができる。故に意欲的かつ情緒的なものである。しかし一方、師の教え、すなわち法を見、理解することから生ずる究極の目標に向けての知識と経験に対する信賴、という認識的見地の方が本来重要であるとの結論を下している。

終章は A 〓 E 五つの節から成っている。A 節においてはテキストについての成立史的考察がなされているが、今はそれがアソーカ王時代前後の佛教教理の一部を成すものであるという、最も無難な立場に著者が立っていることを眺めておくに留めたい。

B C 両節では無我理論の積極的機能と阿頼漢のきまり文句(A)

の迦的機能について述べているのであるが、その要点は 161 以下に a・d の四つの項目にまとめられている。すなわち a・M.N. は無我なる「私 the I」についての理論を確認している、b・M.N. は宗教生活の目標が vimutti/nibbāna であるという見解を確認している、c・宗教生活の目標と人という概念とは、精神が発達していく上で相互に影響を及ぼしあっている、(この相関性が初期佛教の本質的な部分であるという) d・先に示された仮説が a b c の三点によって証明された、という四点である。結局ここでは佛教を不滅主義と考えたり絶滅主義(annihilationism)と決めつけたりする西欧人の間に従来しばしば見られた佛教観に対して、涅槃の二面性(終息であると同時に解放である)を主張することによって反駁を試みたのである。

そして D 節では知覚(sañña)を前提とする経験的地盤に立つ知識こそが佛教の総合的な慧(pañña)であることを再確認しつつ、一方の信は情緒的・意欲的なが故にこの慧を包括するものであり、同時にその慧に到る手段でもあるという。こういった一連の体系を西欧哲学と比較してみるのは何ら意味のないことであり、重んずべきは道 the Path であるとも言う。

最後の節ではこれら阿羅漢果を語る経の今日的意義を説くことによって全体を締め括っている。

#### 四

右はごく大まな要約であり、勿論これ以外にも多く興味の

持たれる箇所がある。たとえば第十章の空と涅槃についての論述(そこでは suññatā と nibbāna が同義ではないことを指摘している)は示唆に富んでいる。また随所に見られる業理論の導入も興味深い。ただ因果の理を強調している割には、五欲・五蓋・渴愛といった情意的な立場からのみそれが論じられていることには若干の不満が残る。なぜなら、もっと知的な面での解脱の有り方が初期佛教に考えられないかとの疑念が生ずるからである。わが国における本書と同様な研究には、筆者の知る限りでは舟橋一哉博士著『原始佛教思想の研究』があるが、その第三、四章「阿含の実践道における自覚の問題」「阿含における解脱思想展開の一断面」においては、主としてサンユッタニカーヤに依りつつ、十二縁起説をもとに信・智・解脱の問題が扱われている。本著者の場合にも進んでこういった方法の取られることを望むと同時に、読者諸賢には両書を合わせて読まれることをお奨めする。

著者は終章において、佛教に西欧哲学の方法論を導入することの無意味さを語り、また後代の佛教(ことに日本佛教)の形而上学化の傾向を非難している。そしてまた、この研究を通じて見出された佛法僧の三宝に対する帰依を足がかりに、解脱、涅槃に向かおうとする著者自身の姿勢が窺える。著者が自身の思想的拠り所を佛教に求めているのは明らかなのである。

概して著者の論証態度は穏当なものであるが、それがまた少くとも七〇余に及ぶ東西の佛教学者の著書論文からの引用に現れている。しかし惜しむらくは、それらの学説の多くがほとん

ど無批判的に著者の立場を補強するものとして採用されていることである。それらの検討のプロセスの一端なりとも披瀝されて然るべきであろうと思われる。

最後に本書に残された最大の問題点は、その研究の方法にある。つまり資料をX・Y・Z中の阿頼漢のきまり文句の見出される経だけに限ったという点である。いかなる結論が導き出されたとしても、この方法は是非が確かめられない以上、それを是認

するわけにはいかない。よってそれが今後の著者の試練となろう。

尚、本書はその内容の大部分を各経の詳論に費しているので、著者が「まえがき」で述べているように、まず序文と終章から読み始めるのが好都合かと思われる。

(Studies in the History of Religions XXXVII. xi + 128p  
Leiden, 1977)